
緑のピアス物語

楓イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑のピアス物語

【Nコード】

N4315B

【作者名】

楓イツキ

【あらすじ】

いつもと変わらない村に青年は住んでいました。名前はアーク。左耳には緑色のピアスがついていて、このピアスには不思議な力が宿っているのです。17歳を迎えたある日に事件は起こります。そこでアークは旅をすることを決意し、仲間と出会ったりして冒険をします。自分は何者なのかを知るために………世界のために………

第1話 出会い（前書き）

初めて書くので、感想なんかがありましたら、大変嬉しいです!!

第1話 出会い

今日もいい風だな…… 空を眺めながら風を肌に感じつつ気持ちよさそうに寝ている一人の青年 この青年の名前はアークといい、小さい時から母親や父親がいなく、近くに住んでいるイノキと言う人に育てられた

母親はナタリと言う人だったが、アークがまだ一歳の時に亡くなってしまった。ナタリとアークはこの世界に住んでいる魔物に襲われてしまい、アークが襲われそうになった時ナタリが庇って魔物にやられてしまった。アークが次に殺されそうになった時、偶然通りかかったイノキが魔物を倒してくれてアークは一命をとりためたのだった。イノキはすぐにナタリの容態を見て思った。

（これはもう…… 助からない……）

イノキはそう思った時、ナタリは最後の力を振り絞って言った。

「どうかこの子を、アークを我が子と思って育てて下さい。」

ナタリは微笑んで息を引き取った。

イノキは突然過ぎて困ったが、ナタリが命をかけて守ったこの子供を育てようと決心した。

「アーク。今日から俺がお前の父親だ。ナタリの分まで生きるんだ。」

するとアークの耳がキラツと光った。何だ？と思って見てみるとピアスがついていた。

「緑のピアス…… この親子は一体……」

イノキは不意に悲しい顔をしたが、すぐに気を取り直して自分の村に帰って行った。

第1話 出会い（後書き）

初めまして！！小説を書くのは初めてなので、不安でいっぱいです

……

感想なんかがありましたら是非お願いします。

第2話 ピリングス

「さうて、そろそろ帰るか」

アークは起き上がるとイノキがいる家に向かった。辺りはすっかり日が落ちて暗くなっている。

（今日は仕事がなかったから、のんびりしすぎたな……）

仕事とはこの世界に住んでいる魔物を狩ることである。しかし普通の子供では、一番弱いスライムと言う変な形をした液体状をした魔物ですら倒せない。

アークが何故魔物を倒せるかというと左耳についている、

緑色のピアスのおかげなのだ。

ピアスの本名はピリングスと言う。

ピリングスはどうかやら古代から魔物と戦うために作られたらしい。その力は人間の身体機能を上昇させるだけではなく、魔術も使えるらしい。ピリングスの色は属性を表している。種類は色々あるみたいだが、アークが知っているのは緑色の風属性、赤色の火属性、青色の水属性、そして白色の光属性の四つである。

アークの属性は風。しかしアークは魔術が使えない。

イノキは不思議に思っているらしいが、魔術が使えなくても、剣術に風属性をつけることが出来るので十分戦えるのであった。

ピリングスの数は世界中にたくさんあるらしい。

この村、ナルキ村には約二十人ぐらいはいる。しかし、俺みたいに身体機能は上がっていないし魔術も使えなかった。一人や二人で狩りに行くと、運がいい奴だと魔物を倒して帰ってくるが、ほとんどの人は殺されてしまっていた。

そこで、魔物を狩る時は四人ぐらいで班を作り、それで魔物を狩るという制度が出来たらしい。

ナルキ村で身体機能が上がっている奴は俺も含めて二人しかないのだ。

第2話 ピリングス（後書き）

読んで楽しんでいただけたら、嬉しいです!!

第3話 リクトく思い出（前書き）

早くも新キャラ登場です!!

第3話 リクトゝ思い出

アークはイノキの家に向かっていた。
見慣れている暗い道を歩いていると

アークじゃないか!!」

突然暗い道で後ろから呼ばれてピタツと足を止めた。(この声は……) 「いやゝ偶然だな」

全力疾走で息を切らしながら走って来た青年が嬉しそうに言った。
「今日は何をしていたんだ? リクト」

そう言ってアークはリクトが追いついたら再び歩きだした。

この青年の名前はリクトと言い、アークの魔物狩りのパートナーでもある。二人は小さい頃からずっと一緒にいた。リクトのピリングスの色は赤。リクトは剣術も使えるし火の魔術も使えるのだ。村のみんなからは朱炎しゅえんのリクトと呼ばれているのだが、他の町や村からは破壊の火竜と恐れられている。理由はその内分かるだろう。

「今日は鍛冶屋に行って剣の手入れをしていたんだ。」

「ハア?? 剣の手入れなんて家でもできるだろ!？」

「それはそうだが、やっぱり鍛冶屋で剣を手入れすれば切れ味は最高だし、色だって錆びきった色から綺麗になるじゃないか!! 剣は俺達魔物狩りにとって命だからな!」

「いや…… お前はほとんど魔術で攻撃するだろ……」

(リクトって本つつ当にきれい好きだな……。)

「まあそうだな。そういえばお前の剣も手入れしてやったぞ!! 前より強くなっているはずだ」

「マジで!?! 昨日、明日は休みだからって剣を貸せって言ってたか

ら、何をするんだろうつて思っていたけど、ありがとうな!!」

リクトから剣を返してもらうつと、早速鞘から剣を抜いてみた昨日までは、普通の剣だったのが月の光に照らされて、そこには緑色の剣が光って見えた。

「すっげー!!これならドラゴンでも斬れるような感じだな!」

ドラゴンとは魔物の中でも最強に近く、大きさは小さくてゾウと同じぐらいで、めったに人の前に姿を現さない魔物だ。

その鱗はどんな物をも絶対に通さないと言っほど硬く、鉄をも一瞬で溶かすほどの炎を吐くのだ。

アークとリクトが15歳のときに相手にしたことはあるのだが、全く歯が立たなかった。

（もうだめだ……）と思ったとき、崖から落ちたが、運よく川に落ちたため何とか村に帰ることが出来たのだった。あの時ほど怖いと思った事がないのだが、今の魔物狩りは手を抜いていても楽に倒す事が出来るほど強くなっていた。

もう一度ドラゴンと戦ってみたい……自分の力を試してみたいと思っていたのだった。しかしドラゴンは滅多に村の近くまで来ない山に巣を作りそこに住んでいるのだ。巣を変えることはめったにない。戦おうと思えばいつでも戦えるのだが、やはりあの時の怖さが残っていて、あの時は帰ってこれたけど、次は帰って来ることが出来るだろうか。と思うと戦う気になれなかった。

「そうだ、今日イノキさんに用事があるからお前の家に行ってもいいか?」

「珍しいな…親父に用事があるなんて、いいぜ、家に行こう」

アークは何の用事だろうと思ったがそこまで聞く必要はないと思い、二人はイノキの家に向かった

第4話 誕生日

「ただいま」

いつもと変わりなくドアを開けて入って見ると、そこには普段では絶対に見られないごちそうが置かれていたのだった。アークは

（親父ってこんなに料理を作れたのか……）

と心の中でびっくりしていた。リクトを見るとニッコリとアークを見つめて笑ってた。

「誕生日おめでとう!!」

リクトの口からそんな言葉が言われた。

「えっ!? 誕生日!? ってことは俺17歳になったのか!？」

「そうじゃよ。今日はお前を拾って16年目じゃ。ナタリが亡くなった日でもあるのだが……。とりあえず、ナタリの墓にリクトと一緒に行ってこい」

イノキはそう言って、アークとリクトを行かせた。

ナタリの墓は家のすぐ近くにあるのだ。アークとリクトはナタリの墓の前で、

「今日で17歳なのか………なんだがそんな気がしないような感じだ………そう言えばリクト、どうして誕生日を祝ってくれたんだ？」

アーク達は魔物狩りで忙しく誕生日など祝う暇もなかった。それで自分の誕生日がいつだなんて覚えていないのだった。

「今日は魔物狩りがなかったからな………お前を祝ったこともな

かったし、イノキさんと一緒にアークを祝おうって決めたんだ」

「えっ？じゃあ、あのごちそうはお前と親父が作ったのか！？」

「まあな。それで準備が出来たからお前を迎えに行ったということさ。それで、その剣は俺からの誕生日プレゼントだ」

「リクト……………ありがとう！！でも俺、お前に誕生日プレゼントをやってない……………いつかこの剣と同じような物を作ってやるからな！！」

「ああ！！期待して待つてるぜ。」

アークとリクトは笑いながらナタリの墓の前で話して、

「よし、じゃあイノキさんのところに戻るか。」

そう言つて二人はイノキの家に戻って行つた。

「おっ！？帰ってきたな」

イノキが待ちかねていたように言つた。

「今日は俺のためにありがとう。親父、リクト」

アークは照れながら言つた。こんなに嬉しいと思つたのは初めてかもしれない。

「今日はお前の誕生日なんだから、祝つて当たり前だろ。これから

もよろしくな、アーク」

リクトも照れながら言った。アークが喜ぶ姿が見れて安心したようだった

「さて、俺からも誕生日プレゼントをやるか。」

イノキがポケットから、透明な色をしたピリングスを二人に渡した。

「イノキさん？何で俺にもくれるのですか！？」

リクトはおどろいてイノキに言った。

「リクト。お前にはいつもアークが世話になっている。それに、誕生日プレゼントもお前にやってなかったから、今日は二人を祝おうって思ったんだ。貰ってくれ」

「イノキさん……………ありがとうございます！大切にします！」

「親父、ありがとう」

二人は早速右耳にピリングスを付けた。透明なピリングスもなかなか綺麗だと思った。「よし、じゃあ食べるか」

リクトがそう言って三人は料理を食べ始めた。どの料理もとても男が作ったものだと思えないほど美味しかった。

三人が食べ終わると、リクトは

「じゃあ俺はそろそろ帰るよ。明日から仕事が始まるが頼むぜ、アーク」

「ああ、リクトも頼むぜ」

二人はそんな会話をしてリクトは家に帰った。

（よし、俺も明日から始まる仕事に備えて、今日はもう寝よう）

アークはそう思って早めにベッドに寝ることにした。明日が待ち遠しいと思っていたが、その日に自分の人生を変えるような出来事が始まるうとしているなんて、知るよしもなかった。

第4話 誕生日（後書き）

次から物語が始まるので読んで頂いたら嬉しいです。

第5話 依頼（前書き）

少しでもグロテスクなところがあります

第5話 依頼

夜が明けた。朝の光がアークの眠りを覚まさせた。

アークは思いつきり体を伸ばして起き上がると

「さて、今日も頑張るか」

と言った。腰に付けるポシエットみたいなものに、怪我を早く治してくれる回復薬やケータイ食料、などを入れた。準備が出来て出発をする時アークは、

「親父、行つてきます!」

と元気よく言った。イノキは

「おお、今日も頑張つてこい!!」

とアークより大きな声で言った。これは毎日していることだ。自分の気持ちを落ち着かせるためであった。

(さてと、まずはリクトが待っている依頼場へ行こう)

依頼場は魔物を狩ってほしいと言う人達が手紙や直接来て依頼することである。依頼を達成すると依頼主がお金をくれる。また、依頼にはそれぞれランク分けをされている。ランクはA〜Dまで Aに近いほど難しくなりDに近いほど簡単な物である。しかし、Aランクはめったに依頼されて来ない、Bランクですら時々依頼されるほどだ。たいていはCとDランクだ。

依頼場に着いて、アークは中に入った。中は明るく人が何人かいた。

「アーク！待ってたぜ」

リクトはすでに依頼を決めて手続きをしている所だった。

「リクト、おはよう。今日も頑張ろうな！ところで今日の依頼は？」

アークはワクワクしながらリクトに聞いた。

「今日は森に行ってキノリーフを取ってくる依頼だ」

キノリーフとは薬草のことである。森に沢山生えているのだが魔物がうろついているので、魔物狩りにしか取って来れない物だ。効果は熱を冷ましたり、風邪を治してくれる。

「そっか、キノリーフか……誰か風邪になったかな。」

「まあそうゆうことだ。行くか？」

「ああ！もちろんだ」

二人は笑いながら依頼場を出て行った。

森に入ると、いつも通り小鳥の声がした。空気も澄んでおり、太陽の光が湖を照らしてとても綺麗だ。二人はその中を歩いていた。

「確かキノリーフって森の奥に生えているんだよね？」

アークは思い出しながら言った。

実はこの依頼は久しぶりだった。もう二年はやっていないだろうか。いつも魔物退治をやっていたので、どこにあるのか忘れていた。

「ああ……キノリーフは森の奥地に生えているんだ。より澄んだ空気を好んで生えているんだ」

「そうだった……俺すっかり忘れていた……」

「気にするな。二年も経てば忘れることもあるからな」

二人はそんな会話をしながら、森の奥へと進んで行った。すると

グルルルルルル！！

一匹の熊のような動物が出て来た。名前はグリベアーだ。二人は剣を構えた。

「アー

ク！！いつもの作戦で行くぞ！！」

「分かった！！」

まず、アークがグ

リベアーに突き刺した。グリベアーは顔を歪め、すかさず右手でアークに攻撃した。が、アークは剣でその攻撃を受け止めた。アークとグリベアーがそんな戦いをしている時、
リクトが

「焼き尽くせ！

フレイム！！」

と叫んだ。

すると三個の火の玉が出てきて、グリベアーに向かって行った。だが、グリベアーはアークと戦っていたので全く気付いていなかった。

そして、火の玉がグリベアーに当たりグリベアーは吹き飛んで死んだ。

「こんな魔物、俺達にとって楽勝だぜ」

アークが嬉しそうに言った。

「まあ、ここらの魔物は俺達にとって楽勝だからな。よし、キノリーフはもう少しだ！行くぞ」

二人はさらに森の奥に入って行った。

第6話 アンナとドラゴン

森の奥地に行くと、辺りは少しだけ霧に包まれていたが戦闘には影響はなさそうだ。空気がとても澄んでいるのが分かる。

「スッゲーな！！久しぶりに来たとはいえ空気がまるで違う！！」

「ここは、空気が新鮮だから村の人達は精霊の森とも言われているみたいだからな。」

「そうなんだ。あつ！リクト、あそこの木下！！」

アークが指を差している所を見るとキノリーフが生えていた。

キノリーフは黄緑色をしているのですぐに分かった。 「アーク、よく見つけたな！！よし、あれを採って今回の依頼は終了だな」

二人は走り出そうとした瞬間だった……

「隠れて！！！！」

女性のような声が聴こえたと思った瞬間、何かの力に二人は引っ張られた。

「なっ何をしやがる！！！」

アークは女性に怒鳴った

「落ち着いて！怪しいものじゃないわ。私の名前はアンナ16歳よ。出身地は首都アンデル」

「アンデル！？アンデルって確か一番栄えている所だよな！？どうしてこんな所に！？」

リクトは驚きながらアンナに言った。この森に珍しいものなんて何もないからである。わざわざ首都からこんな所まで来るということは何かあるに違いないからだ。で、わざわざアンデルからこんな田舎に来るといふことは何かあるんだよね？っていか何で俺達に隠れるように言っただんだ？」

アークはイライラしながらアンナに質問をした。しかしアンナは驚

きながらアーク達に言った。

「あなた達、もしかして魔物の気配が分らないの!？」

「魔物の気配!？」

二人は一緒に言った。そんな二人を見てアンナは

「なるほど、この村では魔物の気配が分かる人がいないのね……………」

「どうゆう意味だ!？」

リクトが不安そうに言った。

「魔物には気配……………」というか常に体から発生されているオーラがあるの。そのオーラを感じると強さが分かるんだけど、強さが分かれれば倒せるか倒せないかが分かるから命を落とす可能性が減るって
いうわけ」

「ちよつとまで! ! じゃあアンナは魔物の気配を感じるなら、さつき隠れてって言ったということは強い魔物がいるということなのか! ?」

アークはそう言いながら、今ここにいるのはヤバイということも知った。

「逃げるのはもう不可能よ。こっちに向かって来てるし、すぐに見つかってしまうわ。ここで何とか見つからないようにするしかないわ」

アンナは冷静に言ったが焦っているということも二人は悟った。

「来た! !」

アンナが小言で言ったその時だった。

空から何かが降りて来た。体の大きさは家ぐらいはあるだろう。色は赤というか真紅と言ったほうがいいほど美しい色だ。その姿は…

……

「ドラゴン! ?」

アークは叫びそうになったが、何とか小さい声にして言った。

「冗談じゃないぜ! なんだ! ? あの大きさは! ? 俺達が倒せるって
いうレベルじゃない! !」

リクトも驚きながら、何とか声を押し留めて言った。

「とにかく、今は気配をなくしてドラゴンに気づかないようにするわよ」

三人はそのままドラゴンの様子を見ることにした。

ドラゴンはどうやら水を飲みに来ただけのようだった。辺りを全く警戒してないようだ。水を飲み終わったドラゴンが飛び立つ時だった。

ドラゴンの動きが自分達いやさつき倒したばかりのグリベアーに気づいてしまったのだ。そして目が自分達が隠れている所に向いた。

「気づかれた！！ドラゴンと戦うわ！！」

アンナが出た。

「マジかよ！！仕方ない。リクト行くぞ！！」

「分かった！！」

二人も出た。ドラゴンは尻尾でアーク達に攻撃しようとした。もの凄い勢いだ。その攻撃を何とか受け止めると二人はドラゴンに剣を刺した。だがドラゴンのウロコの硬さは尋常じゃなかった。少し刺さったが肉までとどいてないことが分かる。（くそ！！今の俺達じゃ倒せないのか！？）

アークはドラゴンの攻撃を避けながら隙を見せたら剣で攻撃をしていた。ダメージを受けてないが足止めなら出来る。もう少して……

「焼き尽くせ！！フレイム」

と叫んだ声が響いた。

リクトが魔術を使ったのだ。火の玉はドラゴンに当たったがダメージはなかった。するとドラゴンの口から火の粉が見えた。

「マズイ！！避ける！！」

リクトが言った瞬間、ドラゴンから火の玉が発射された。リクトの魔術の比ではない。強烈だ。

火の玉が通った後は草花は燃えていた。

二人は何とか直撃は受けなかったが火の玉が通っただけで吹き飛ば

された。

（くそ……もうだめだ）そう二人が思った時、

「敵を包め！スイロウ」

と言った瞬間ドラゴンの体が水でできた玉の中に閉じ込められた。

ドラゴンは暴れたが水の玉は壊れない。

（やった）と思った瞬間、ドラゴンを包んでいた水が煙みたいなものを出しながら消えて言った。 「まさか！？体の温度を上昇させて、水を蒸発させたの！！？」

三人は死ぬ覚悟をした。やれることはしたが全て通用しなかったからだ。しかしドラゴンは三人を、いやアークだけを見ていた。そして翼を広げて飛んで行ってしまった。

「助かった……のか」

アークは空を見上げて言った。

「どうして殺さなかったのかしら……」

二人が不思議に思っていると突然リクトが

「おい！！キノリーフが！！」

アークはキノリーフを見た。すぐそこにあったキノリーフはドラゴンとの戦いで燃えていた。

これ以上キノリーフは探せない。森の奥に行くとさらに危険だからだ。

「仕方ない……今日は帰るか」

アークが言った時アンナが青ざめた顔をして、

「二人とも！！あれ！！」

と空に指を差して言った。二人は見た、空に黒い煙が上っているのを。

「まさか！ドラゴンが村を破壊しに行ったのか！？」

リクトとアークも顔を青ざめて言った。

「急ぐわよ！！このままじゃあ村がなくなるわ！！」

三人は全速力で村に帰って行った。

第7話 はじまり

アーク達はナルキ村に着いていた。しかし、その景色をみて三人は驚愕した。家は全て焼かれていて焦げた臭いがする。そしてあるものはドラゴンの炎で焼かれて死んでいた。またドラゴンが引つкаいたであろう死体に爪後が残っていた。女、子供まで……。

「俺達の村が…」

どうして……」

アークは震えながら言った。だれがやったのかは分かっている。だが村を襲うなんて……。

三人が沈黙をしているとアンナが口を開いた。

「普通ドラゴンは村や街を襲わないハズなんだけど、あのドラゴンは違うのよ。何か理由があるハズなんだけれどまだ分からないの……。私は理由を知るためにあの森にいたの……。」

アンナの言葉を聞いて二人は（確かにドラゴンが街や村を襲ったただなんて聞いた事がない……）と考えていた。その時、アークが突然、

「親父!!」

と言って全力疾走で自分の家に走って行った。

アンナとリクトもアークの後を追った。

走っているうちにアークはこれは夢だと信じたかった。

あんなに美しかった村が今は地獄のような景色だからだ。（親父……生きていてくれよ……）今のアークには祈ることしかないのだった。

自分の家に着いたが、やはり焼けていた。アークは必死にイノキを呼んだが、返事が返ってこなかった。リクトも叫んだがやはり返ってこない。

するとアンナが

「全てを呑み込め!!」

サーランス!」

と言った。すると上から大量の水がアークの家を流した。アークは驚いて

「おい!なにをしゃがる!」

とカンカンになっていると。

「アーク!あれを見る!」

とリクトが言った。アークが見ると、地面にドアがあった。

「そうか!もしかしたら」

地下室にいるんじゃないか!？」

アーク達はドアを開けた。すると、

「お前ら!生きていたか!」

と嬉しそうにイノキが言った。

「親父!大丈夫だったんだな!？」

とアークも嬉しそうに言った。

地上にイノキを出すと、さすがにイノキも驚愕した。

「すみません、イノキさん私の名前はアンナと言いますが、ここで何があつたのですか!？」

とアンナはイノキに質問した。イノキは質問に答えた。

「お前達が依頼を受けている時だった……突然、空から赤いドラゴンが来たんじゃない……。そして、いきなり家に炎を吐いて燃やしたんじゃない。俺は急いで地下室に閉じこもったが、まさかこんなことになるとは……」

.....

四人はしばらく沈黙した。何かを考えていたアンナが言った

「私はこれから国王に報告しに行きます。良かったらあなた達も一緒にアンデルに行きませんか？」

「どうして、俺達もアンデルに行かないといけないんだ？」

リクトは不思議そうにアンナに質問した。するとアンナは

「あの赤いドラゴンと戦っている者はみんな殺されているのよ。逃げようとしても追って来てね。でも私達は殺すどころか生かされた……。これには何か理由があるハズだと私は思うの……。」

アンナの話が終わると三人は考えた。それから間もなく最初に答えたのはアークだった。

「俺はアンデルに行きたい……。あのドラゴンの情報があるなら王様に聞いて倒したい！みんなの為に！！」

そうアークは決意して言った。次にリクトが答えた。

「俺もアンデルに行く。理由はアークと同じだが、一緒に行けば戦力的にも少しはなると思う。足手まといにならないように努力する！」

最後はイノキが言った。

「わしはこの村に残ると思う。この村はお前達の故郷じゃ！お前達が帰って来る頃までには何とか直してみせる！！」

イノキもまた決心をしたようだった。

「分かりました。それでは二人とも宜しくお願いします。イノキさん頑張って下さい健闘を祈ります。」

「親父………行ってくる！！」

アークはきつと親父なら大丈夫だと信じた。

「行って来い！三人とも、気をつけてな！」

こうして三人はアンデルに向かって出発した。

空は晴天。どのくらいの時間がかかろうと、みんなのかたきを取れるなら……どんな試練だろうが突き進む！

三人の旅が今始まった。

第7話 はじまり（後書き）

やっと物語が始まります……。遅くなってすみません（ - ” - ； ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4315b/>

緑のピアス物語

2010年10月28日03時05分発行